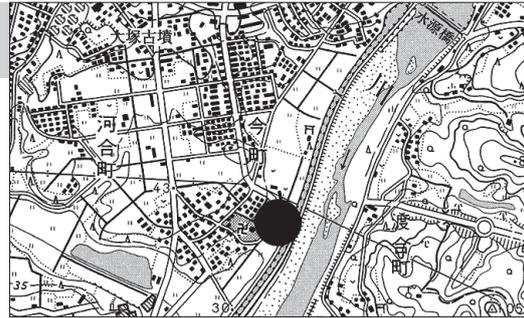


いまちよう
今町遺跡

所在地 豊田市今町地内
 調査理由 第二東海自動車道建設
 調査期間 平成12年6月～11月
 調査積 4,000 m²
 担当者 花井伸・小嶋廣也・武井繁樹・成瀬友弘・永井邦仁



調査地点 (1/2.5万「豊田南部」)

調査の経過 発掘調査は、第二東海自動車道建設に伴う事前調査であり、日本道路公団から愛知県教育委員会を通じた委託事業として、すでに平成9年6月に範囲確認調査(面積200 m²)、平成10年9月から平成11年2月にかけて本調査(面積4,400 m²、98 A～98 F区)が実施されている。今年度の調査は、平成10年度調査区の北東側に隣接し、00 A区(400 m²)、00 B区(2,900 m²)、00 C区(700 m²)の3調査区を設定し実施した(以下00略)。

立地と環境 今町遺跡は、豊田市今町に所在する縄文時代から江戸時代までの複合遺跡である。本遺跡は、矢作川右岸の碧海台地上に立地しており、標高は約27～28 mである。台地は、A区からB区へと矢作川に向かって緩やかに傾斜している。また、調査地点は矢作川と巴川の合流点に近く、上流の水原橋付近で川幅が狭くなっている。本遺跡の周辺には多くの遺跡があり、第二東海自動車道建設に伴い本センターが発掘調査を実施した遺跡として、本川遺跡、川原遺跡、郷上遺跡、天神前遺跡、水入遺跡があり、多くの遺構と遺物が確認されている。

調査の概要 平成10年度の調査で、縄文時代、奈良時代、鎌倉時代、戦国時代、江戸時代の5つの時期の遺構と遺物が確認されている。今年度の調査では、縄文時代を除く4つの時期の遺構と遺物が検出され、飛鳥時代から奈良時代までの竪穴住居群と、戦国時代の屋敷地が広がっていたことが明らかとなった。

縄文時代 前回の調査において竪穴住居などの遺構が検出されているが、今年度の調査では残念ながら明確な遺構や遺物を確認できなかった。しかし、B・C区の遺構埋土から、縄文時代と思われる石器が出土しており、石鏃や石錐などの製品の他に、石核(コア)や剥片(フレイク)も見られる。石材としては黒曜石やチャートが多く、頁岩もある。また、剥片の中には旧石器時代にまで遡る可能性があるものが含まれており、本遺跡周辺の遺跡から後期旧石器時代の石器が出土していることから、今町地内でも同時代に人々が活動していたことが推察される。

飛鳥時代～奈良時代 今年度の調査において中心となった時期で、竪穴住居80棟以上、溝1条、土坑数基が確認されている。竪穴住居は重複した形ではあるが、ある程度の集落を形成していたことが明らかとなった。住居の存続期間は、出土した遺物から岩崎17号窯式の古い段階から高蔵寺2号窯式頃までであったと考えられる。住居の規模は一辺が5～7 m程の隅丸方形を呈し、多くの住居で周溝が確認されており、一部の住居からは北壁あるいは西壁にカマド痕が検出されている。ただし、B区のSK 1423とSK 1424は、2.6 m×3.7 m程の隅丸長方形を呈しており、規模から考えて一般的な竪穴住居とは考えにくい。また、検出された竪穴住居には、掘り込みの深さにかかなりの差が見られる。掘り込みの浅い住居は、単に上部が後世の削平を受けた可能性もあるが、それぞれの住居に何らかの機能的な違いを見出すこ

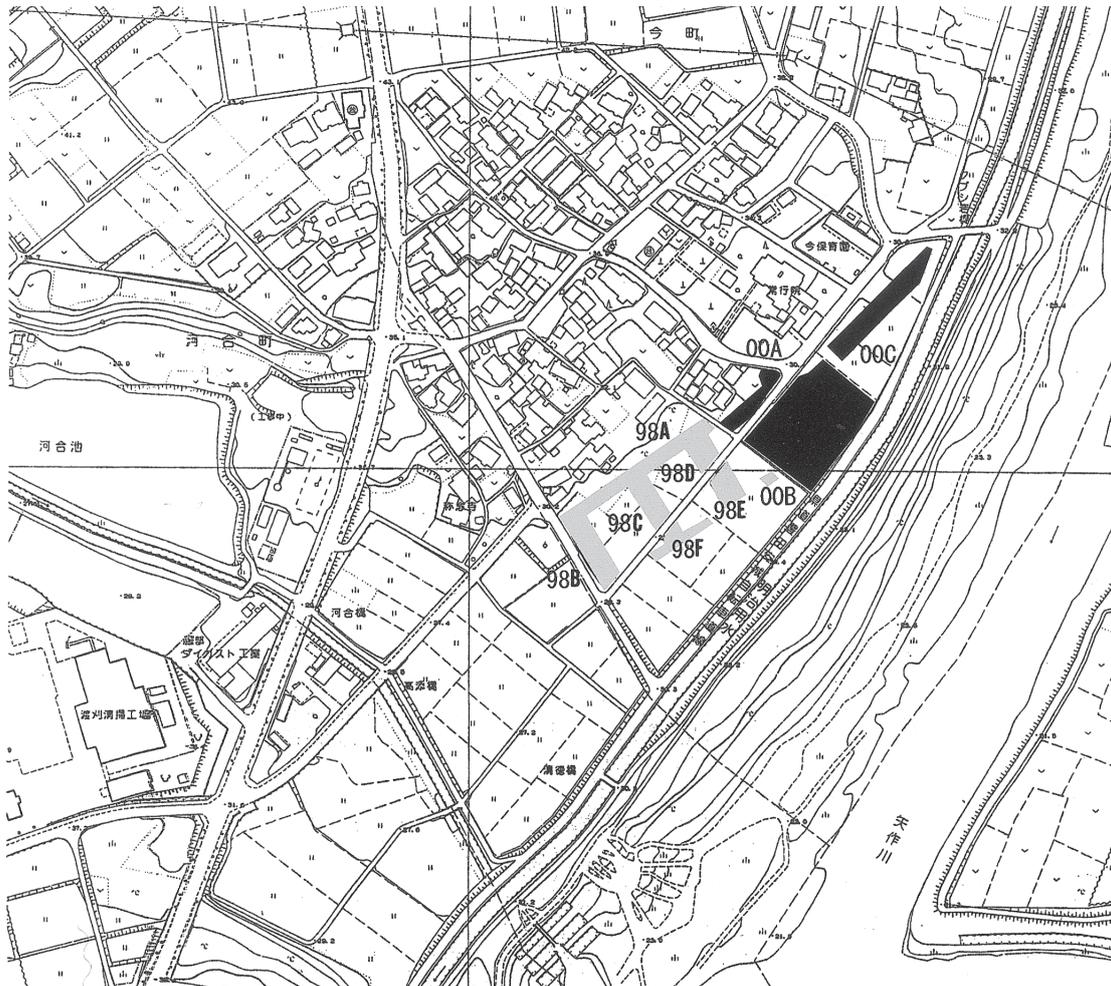
鎌倉時代

とができないものだろうか。出土遺物の詳しい検討が必要となろう。

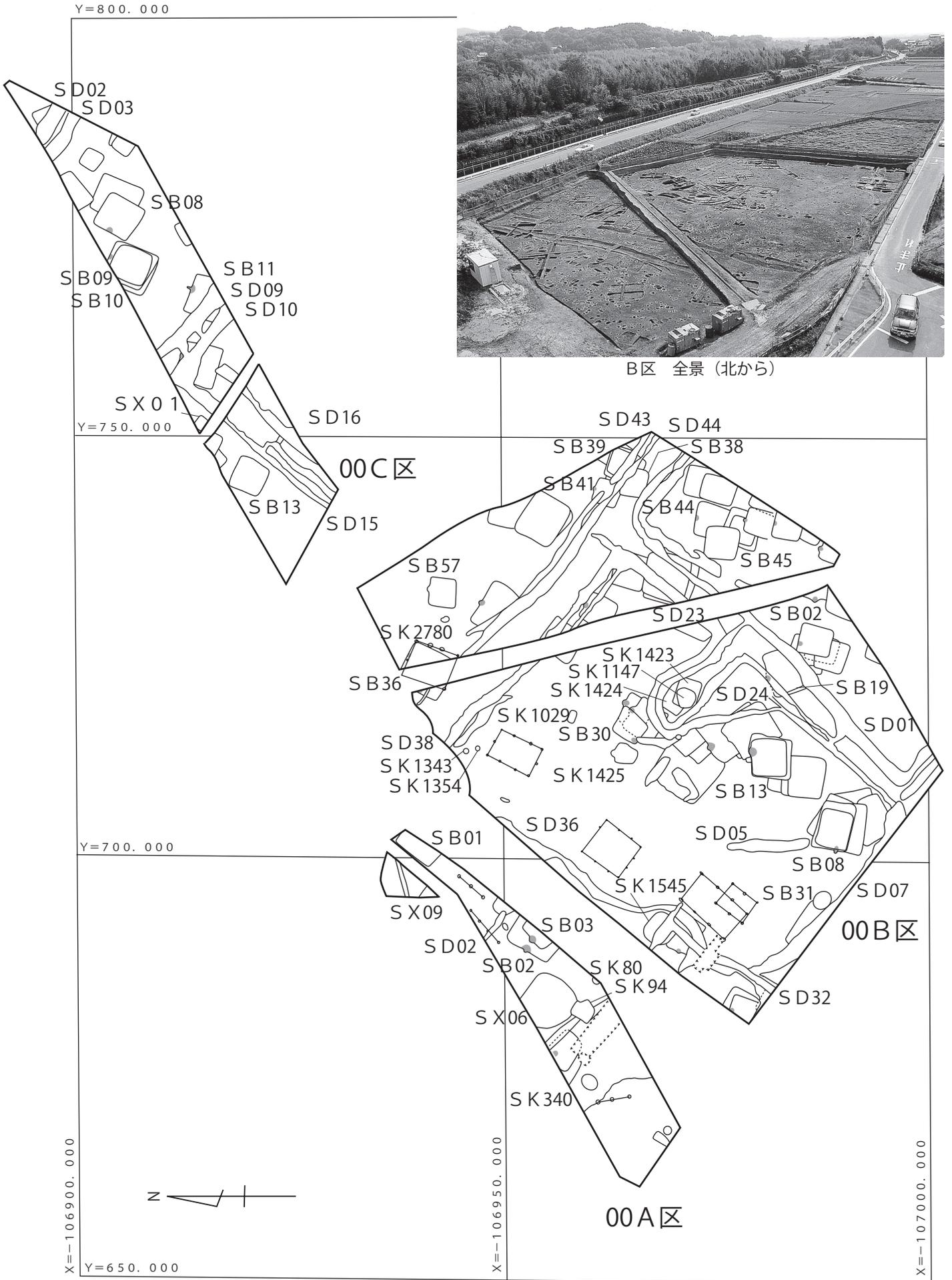
土坑墓約 10 基、竪穴状遺構 2 基が検出されている。前回の調査では土坑墓は確認されていない。形態や埋土が土坑墓に類似した遺構は検出されているが、遺物が出土していないために確定できなかった。しかし、C 区の S X 01 から灰釉系陶器・椀と鉄製の刀子が出土したことにより、今町地内はこの時期に土坑墓が広がる墓域であった可能性が高くなった。土坑墓の形態は、隅丸長方形のものと円形のものの 2 種類が見られる。また、B 区の S B 30 と S K 1425 は、やや不定形で規模は小さいが竪穴状遺構と考えている。

戦国時代

屋敷地を区画すると思われる溝十数条、池状遺構 1 基、井戸 2 基、掘立柱建物数棟などが検出されている。まず、調査区を縦横にほぼ 2 本ずつの平行した溝が走り、その溝に囲まれた一辺が 40 ～ 50 m 程の空間が屋敷地と推定される。その中に、井戸や掘立柱建物が配置されていたと考えられる。また、溝と溝の間には、戦国時代以降の遺構が検出されていないことから、道路として利用されていた可能性が高い。道路は B 区の東側で T 字状に交差している。同様の道路は C 区でも一部確認されている。検出された掘立柱建物については、柱穴から遺物が出土していないことから時期を特定することは難しいが、溝と方向性が近似していることから同じ時期と考えている。また、B 区の S K 1147 と S K 1545 は素掘りの井戸で、掘り形は袋状に広がっている。他に、A 区の S X 06 は石で護岸が行われており、出土遺物から江戸時代まで存続した池状遺構と思われる。



第 1 図 調査区位置図 (1 : 5,000)

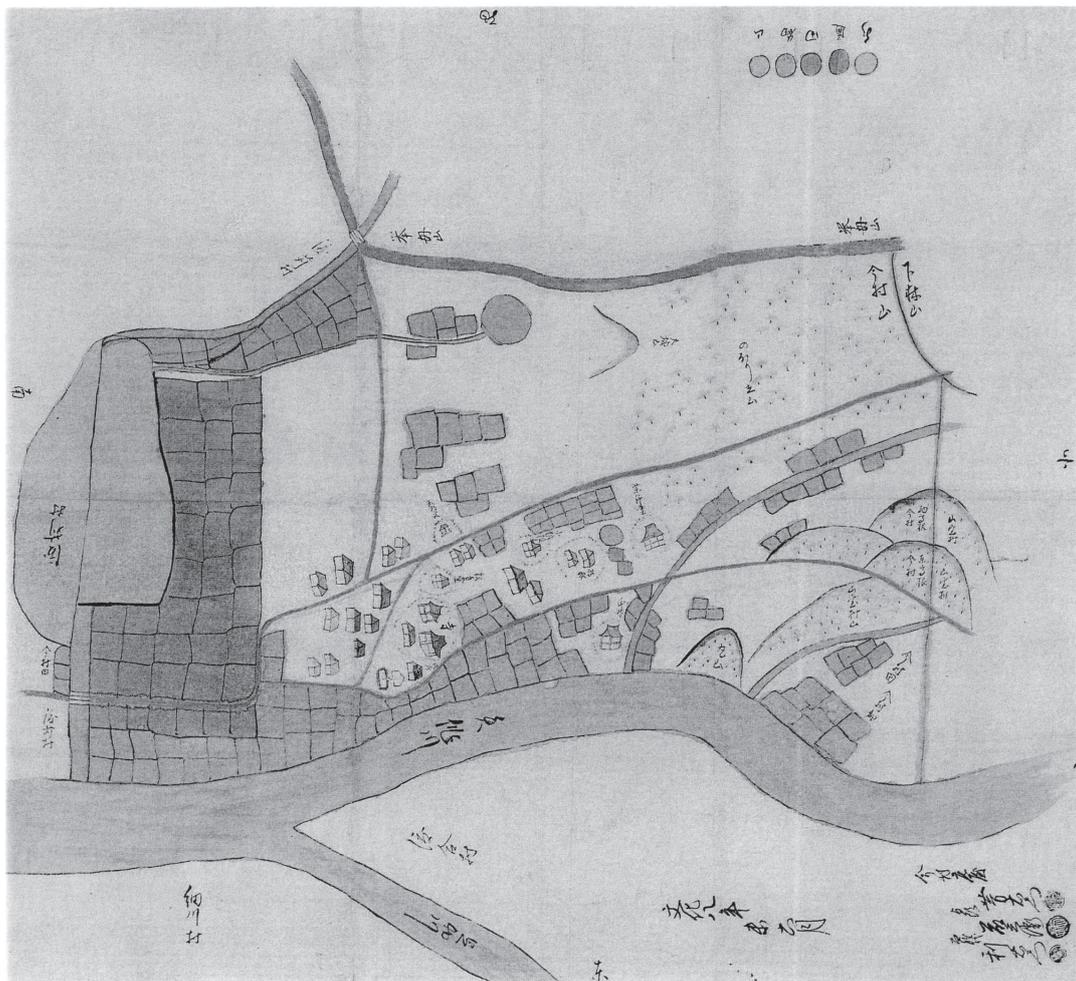


第2図 主要遺構配置図 (1:600)

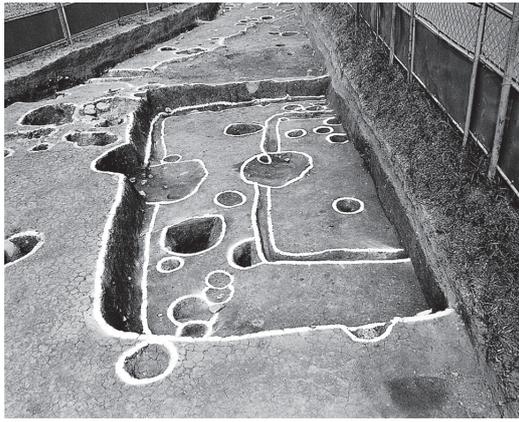
江戸時代 区画溝数条、排水用の溝数条、廃棄土坑数基、井戸3基などが確認されている。江戸時代の前半については、明確な遺構が検出されていないことから、屋敷地が展開していた戦国時代と同じ状況であったと推定される。また、江戸時代の後半には、A区のほぼ全域とB区の一部は居住域、それ以外は水田として利用されていたようであり、水田の広がる農村の風景が想像される。A区のSD 02やB区のSD 32は石組みの溝で、居住域と水田を区画していたものと思われる。A区のSK 94は、南北に溝があることや一段段差が設けられていることなどから、汚水溜りのような遺構と考えている。また、A区のSX 09・SK 80・SK 340は井戸で、曲物などの構造物は確認されなかった。

ま と め 以上、今町遺跡は飛鳥時代から奈良時代までと戦国時代から江戸時代までに集落が形成されていたことが確認された。平成10年度の調査区では竪穴住居は4棟しか確認されていないが、今年度の調査成果から矢作川に沿う形で竪穴住居が密集している様子が窺えることから、未調査部分にも集落が広がっているのではないかと推定される。また、戦国時代の屋敷地が城館跡と指摘されていることから、今後の詳しい検討が必要となろう。

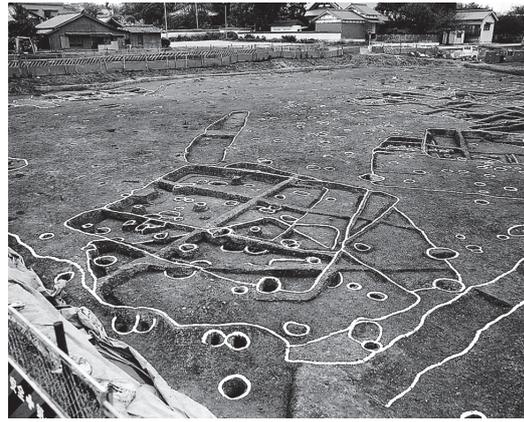
(花井 伸・小嶋廣也・武井繁樹)



第3図 「今村絵図 (文化8=1811年)」(『豊田の古絵図』より転載)



A区 SB 02・03 完掘状況 (南西から)



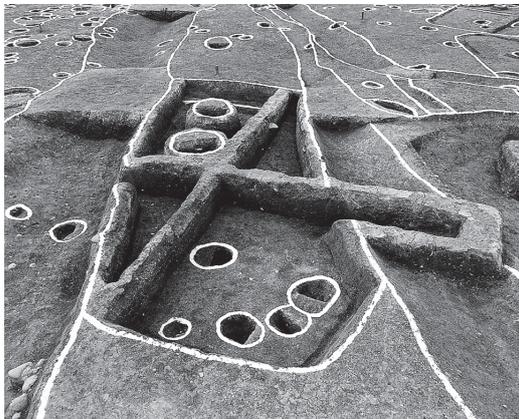
B区 SB 08 周辺 (南から)



B区 SB 39 周辺 (南西から)



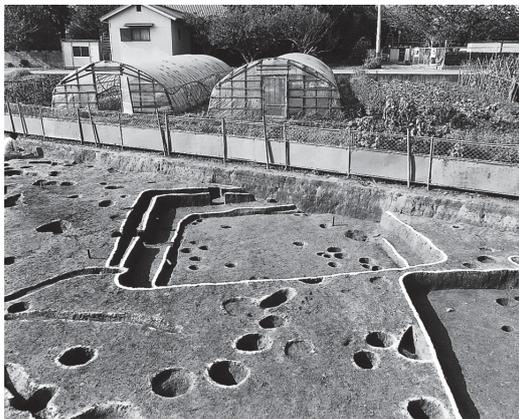
B区 SB 39 遺物出土状況 (東から)



B区 SB 19 全景 (南西から)



B区 SB 57 全景 (西から)



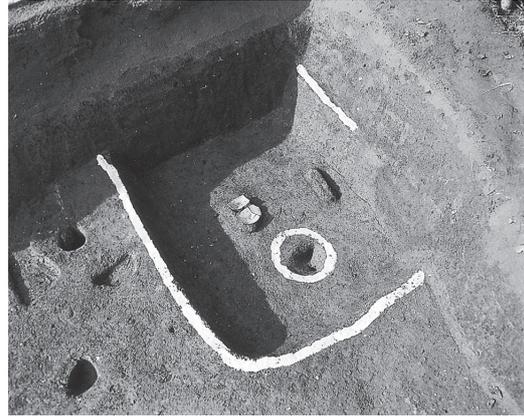
C区 SB 09・10 周辺 (南東から)



B区 SK 1425 (北から)



B区 SK 1029 全景 (北西から)



C区 SX 01 完掘状況 (南東から)



B区 道路状遺構 (北西から)



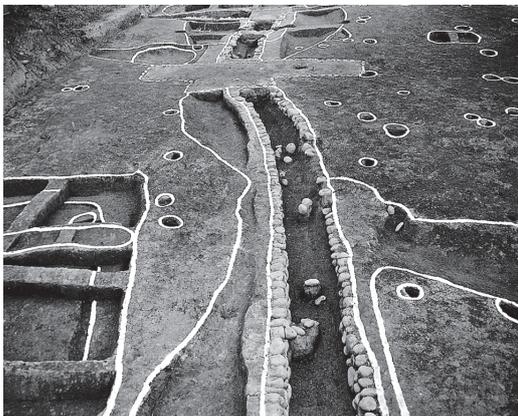
B区 道路状遺構 (北東から)



B区 掘立柱建物 (西から)



A区 SX 06 完掘状況 (北東から)



B区 SD 32 完掘状況 (南西から)



A区 SK 94 完掘状況 (北東から)